

植生とその見方

新潟県山野草をたずねる会会長

小日向孝

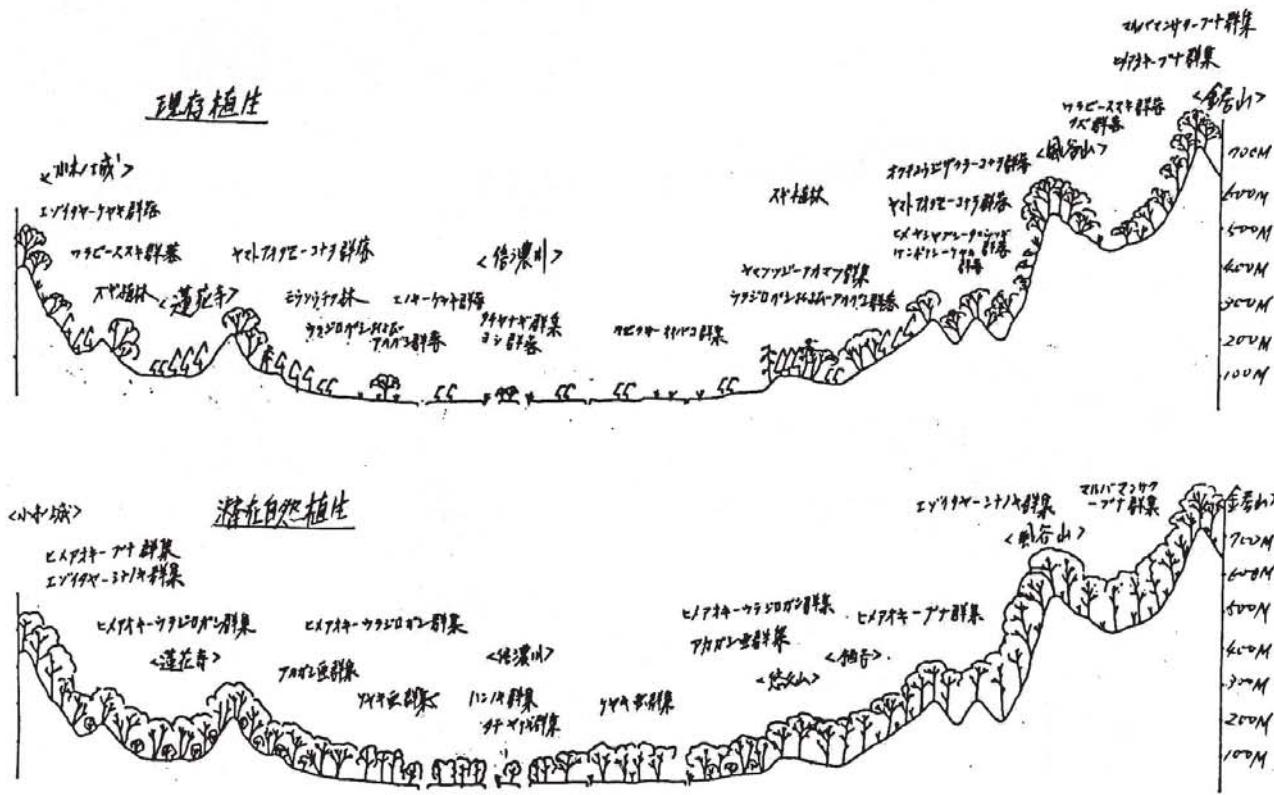
植物の社会、それは静的であり、何の秩序性も動きもトラブルも団結もないよう見えます。しかし、それぞれの種類の植物は個体維持と種族維持のために必死となつて生きるための「生のいとなみ」を展開しています。

植生についての見方は観点によつていろいろですが、群集生態学あるいは植生学的に見ることが一般的となつてきてています。

植生学的、群集生態學的な見方をいくつかに分けてみると、植物社会の構成員となり得る閥門の点から環境的秩序規制と社会的秩序規制に大別されます。また、生活域ということから生理的最適生活域と生態的最適域、植物社会の構成およびひとつつのグループの位置づけから植生単位と植生区分という見方に、植生の自然力の面から現存植生と潜在植生。生活のレベルから木本、草本。人や動物の干渉程度から自然植生と代償（二次）植生などの見方に分類できます。長岡の植生について考えてみたいと思います。様々な環境条件の中でその環境に対応して環境の総合作用の結果として表現された植生現象です。いろいろな種が同一場所に集まって生活している集団をひとつの社会とします。その社会の構成する種の組み合せから群落の特徴を表現する社会の見方があります。これが植生区分です。今迄に把握された主な植生区分を小木ノ城一鋸山ルートについて配分模式図で表わすと次のようになります。今後更に調査を進め、よりたしかなデータを得たいと思います。

新潟県山野草を  
たずねる会機関紙  
第 2 号

事務局  
長岡市下条町 1,406-6  
印 刷  
佐 藤 印 刷 所



## 87・夏の植物生態観察

## —次第浜・きりん山方面

## 植物群落調査表

調査者 山野草訪ねる会

記録者 同上

群落名 アベマキ

Ort (場所) 次第浜 (山王森) Datum (調査日) 62.8.8  
 B1 (高木) 20 = 95% Hm (海拔高) 20 =  
 B2 (亜高木) 10 = 50% Mikrorelief (微地形)  
 S (低木) 5 = 95% Aspect (季節) 夏  
 K (草) / = 20% Kont. Gesell (隣接群落)  
 M (コケ) = % Geolog (地質的) 砂土  
 qm (調査面積) 20 × 20 Boden (土壌)  
 ExP. u. Neigung (方向傾斜)

Aufn. Nr.



方向 (南東)	種類 (5°)	出現種数 (23)	
B1	アベマキ	11 カズズミ	K ナツラビ
+ ヤマトオダモ	11 アズマネザサ	22 ヒマツノキ	+ ノコエシ
+ タケウチテ	22 ヒマツノキ	+ コニユリ	+ ヤマハギ
+ 伏生アラ	11 ハクモクチケ	11 アベマキドリ	+ カルリバラ
+ コナラ	+ タケウチテ	11 カコユリ	11 ハルニア
	+ アズキナシ	+ 2 ハタナカ	+ エゴノキ
	// コマユミ	// ヤマコウジ	+ ヤマリモ
	// ナシハゼ	+ コシボモシグ	+ コラ KI
	+ ハクモクチケ	// ツタウルシ	+ ネズミサシ
	+ カマツカ	+ カリヤス	+ アキシソウ
B2 + ヤマトオダモ	+ フジ	+ ナツハゼ	+ オトヨウシゲクラ
// アズキナシ	+ カズサクラ	+ オオツヅラフジ	+ タラ
22 アベマキ	+ スギ	+ フジ	+ シオデ
+ カスミソウ	+ エノキ	+ シュンラン	+ アケビ
+ ヤマツツ	+ オトヨウシゲクラ	+ チゴユリ	+ ゴヨウアケビ
	+ ハツカタギ	+ ムラサキシキブ	+ クニ
	+ ラジゴロシ	+ コマユミ	+ オオバマユミ
	+ シロタモ	+ アマドコロ	+ コハギバウシ
	+ マモモ	+ レグツツジ	+ シオン
		+ スイ	
		+ タマクラシ	
		+ カズズミ	
		+ スミレ	
		+ エゴノキ	
		+ オヤマボクチ	

## 昭和62年度活動報告

## テーマ 植物の生きざまに学ぶ

- 早春の山野草を訪ねる  
(総会を兼ねてスハマソウ群落の調査)
  - 方面 椎谷、西山(大津)方面
  - 時期 4月5日(日)
- 春の野を歩き、山菜を食べる(食用・薬用)
  - 方面 小国、東山方面
  - 時期 5月5日(火) 小国武石トンネル前  
5月17日(日) 東山方面
- 夏の植物生態観察・採集
  - 方面 次第浜(ハマナス・アベマキ)きりん山
  - 時期 8月8日(土)~9日(日) 1泊2日
- 秋の野に学ぶ会(キノコ)
  - 方面 長岡近郊
  - 時期 10月11日(土) 滝谷山  
10月18日(日) 宮本・薬師方面
- 学び合う会
  - 場所 長岡市内 台町・梅川屋
  - 時期 12月19日(土) PM4:00~PM7:00
  - 内容 山野草を語る スライド視聴  
活動の反省(感想発表を含む)と忘年会
- 機関紙の発行 第2号
  - 時期 12月中旬
  - 内容 活動のあしあと 行事参加の感想 その他

恒例になつた夏の植物生態観察会は、八月八日(土)・九日の一泊二日に行なわれました。初日は、聖籠村次第浜でのアベマキ林、桃嶋が浜のハマナス群落、桃瓢湖のオニバスの観察。そして次の日はきりん山植物群落観察と踏破三川村岩野の将軍杉観察と笛川邸見学。感激は今も胸に迫ります。

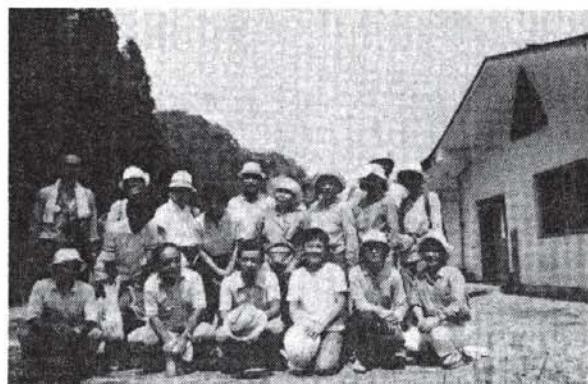
たくさんの人達で盛りだくさんでした。心を一つにして下つたきりん山岩山。あの感動は今も胸に迫ります。

アベマキについて 学名 *Quercus variabilis*  
 アベマキは、ブナ科に属する落葉広葉樹の高木で、通常樹高は10~15m、胸高直径30~60cmです。  
 底部色の樹皮は、コルク層が早く発達し、たまにしづらいたれののが大きな特徴です。葉は細長く、ふらに針のようなさざらがあり、形がクリやクスギに似ていますが、葉の裏は小葉状毛を露出し、底面色をしてるので容易に区別できます。植生同様で、花は5月頃開きますがあまり目立ちません。どんぐりは2年目に熟し、ほぼ球形で殻から半分がぬけでています。

分布は、本州中南部以南の暖地を中心して、山地帯が北限とされています。新熱帯雨林では比較的小なく、主に北緯30~35度のものが多數群生し、島下で最大の規模の優れたアベマキ林となっています。

美しい自然、大切な自然を永く守るためにどうぞ。  
昭和61年3月25日 新潟県・聖籠町

聖籠町山王森のアベマキ林



四つんばいになって越えたきりん山を背景に

## たくさんのきのこに出会った秋の山

(採集された主なきのこ) 滝谷山・宮本方面

スギヒラタケ	○	ドクベニタケ	○
カノシタ	○	ウズハツ	○
ハラタケ	○	ツチカブリ	○
スギエダタケ	○	オトメノカサ	×
ニガクリタケ	○	オオツガタケ	×
スッポンタケ	○	ノボリリュウ	×
サクラタケ	○	オチバタケ	×
オシロイタケ	○	キツネノチャブクロ	×
ヤマアカタケ	○	チャキツネノチャブクロ	×
ナラタケ	○	エリマキツチグリ	×
センボンイチメガサ	○	モエギダケ	×
フウセンタケモドキ	○	コタマゴテングダケ	×
ノウタケ	○	サマツモドキ	×
ウラベニホテイシメジ	○	カワリハツ	×
シロギンネノチャブクロ	○	ヒロヒダタケ	×
キクラゲ	○	フウセンタケ	×
ムジナタケ	○	ネズミタケ	×
カサタケ	○	ハチノスタケ	×
シロテングダケ	○	キチチタケ	×
ヒロロベニヒダタケ	○	コシノムラサキハツ	×
ツチグリ	○	チシオタケ	×
アワタケ	○		
ムラサキフウセンタケ	○		
カワラタケ	○		

◎は11日・18日両日に観察されたもの  
×は毒

## 植物観察に寄せて

郡司 哲三



- アベマキの群生林を見るほどに自然の妙味心して知る
- ハマナスの実は色づきて鮮やかに群れ生うところ桃崎が浜
- 瓢湖にて生える植物観察しオニバスのみは特色のあり
- キリン山キノコの生えるまわりみてその生態を語り合いたり
- 笹川邸古き年代伝え来し森の大樹は天にそびえて

## 麒麟山縦走の記

郡司ねい

- 気楽にも石段登り森をすぎ抜け出たところそこは石山
- くさり網みるだに恐く尻込みすリーダー涼しく峰越すという
- くさり綱命とたのみ下りきて次なる登り象の石岩
- 人間も元は四ツ足山越えに獣の如く手にて歩みぬ
- 呼び交し声交しつつ峰越すは連れある木との心強さよ
- 右みても左をみても息をのむ絶景かなは山下りてから
- みどとなる柱状節理を歩めども心は宙で感動もなし
- 頗上はと答えにはすぐそことだまされ続けついに越えたり
- 山下り帰路に語るは調査より
- いろいろと草木の名をおぼえしがみな落しきぬキリンの山に
- 山下りす人里に待つ湧清水
- これぞまさしく甘露甘露よ水甘露あまりにうまいしそぎ飲みのどよりあふれ鼻よりいでぬ
- 越えし峰下より見上げ感動はより深くして心よきかな
- 縦走のよろこび深しとおもえども二度と越すまじキリンのやせ尾根
- キリン山全員無事に縦走しみな一様に軽き興奮

## 夏の思い出

藤田照子

この度、山野草で一泊二日のキリン山に参加させてもらいました。私にとっては初めての事が多く、大変有意義な二日間となりました。日枝神社でのアベマキ観察でアベマキがコルクのようにならかに幹だった事、紫雲寺浜でハマナスの実が赤く色づいていた事など心に残っています。宿に着き、宴会がはじまるころには外はすごい荒れ方でした。が、稻妻の不気味な光はとてもきれいでした。朝になると雨はあがつていて、うすもやの中をゆっくり近づいてくる舟がまるで絵を見ているかのようでした。朝の散歩の帰りにマタタビを見つけ、マタタビがこんなにすずなりになつているのを初めて見たので夢中で採ってきました。それはハマナスの実といっしょに焼酎漬けにして、今はコハク色をしています。また、キリン山の絶壁を降りる時は、小日向先生の「行きますよ。」の一言で覚悟は決まったものの大変恐く、降りても降りても地面に足がつかないような感じは今でも覚えています。足手まといでしょですが、来年も楽しみにしていますのでよろしくお願ひします。



## 研修旅行の思い出

五十嵐玲子

本当に楽しい山や海辺の学習でした。春の山菜採りで天ぷらの美味しかった事、秋のきのこ狩りのみそ汁の香り、今思い出しても顔がほころびます。中でも一番印象に残るのは夏の研修旅行です。次第浜のハマナス群生地では暑さも忘れて思わず声をあげてしまいました。橙々色の実を沢山つけている中に、咲き遅れた一輪の花がとてもきれいでした。先生の講義も上の空で摘んだ果実は今とても良い色のお酒に出来上っています。

思ったよりもけわしくスリル満点だったキリン山、本物の汗や冷汗でビックショリになりながら、それでも眼下に流れる阿賀野川にみとれました。

キリンの背よりラクダの背のようだなどと話しながら山を下りて飲んだ清水のなんと美味しかったこと、まさに甘露甘露でした。ゴツゴツとした肌のアベマキ、名前の割には可愛かった瓢湖の鬼バス、宿の前の真赤なウワミズザクラの実、どつしりした将軍杉、クックッと喉を通ったビールの味、楽しい思い出をありがとうございました。

## こわかつたなあ！でも

関 恭 子



うす紅色のくさきの花に見とれながら鼻歌まじりに、きりん山を登つて行った。昨夜の雷雨は名残りもなく、明るい日ざしに赤松の老木など木々の緑は白っぽい岩肌に映えて美しく快い。

はるか目の下を蛇行して流れる阿賀野川は、水量が多くほとんど河原も見えない。下のほうに見える広葉樹林の明るい優しそうな緑はもみじだろうかなど思いながら、まだ余裕しゃくしゃくで写真をとったりしながら、いい気持ちで歩き、鎖場も無事に越えた。

ところが——そのあとに来たあの恐怖のやせ尾根。右目で下を見れば木の梢を真上から見、左目を使えば垂直下の水面を見るといった状態。しかりしなければ、慎重にゆかなければとそればかりを考えながら足を進めた。やっとの思いでピーコクを過ぎ一息入れた時「ここを踏破できれば穂高あたりにも登れるかも」という声が耳に飛び込んできた。来年は是非そのあたりを今から心をふくらませている。

うす紅色のくさきの花に見とれながら鼻歌まじりに、きりん山を登つて行った。昨夜の雷雨は名残りもなく、明るい日ざしに赤松の老木など木々の緑は白っぽい岩肌に映えて美しく快い。

はるか目の下を蛇行して流れる阿賀野川は、水量が多くほとんど河原も見えない。下のほうに見える広葉樹林の明るい優しそうな緑はもみじだろうかなど思いながら、まだ余裕しゃくしゃくで写真をとったりしながら、いい気持ちで歩き、鎖場も無事に越えた。

## 単身登山の思い出

平井 信次

くらやみの中、登山道に着いた。

山小屋は、まだ静まりかえっている。

樹林におおわれた道は、かなりの勾配である。闇の中を一步一歩踏みしめながら行くと、はく息も次第に荒くなる。ふと、「何で、こんな思いをして登るのかなあ。家に居れば、朝寝坊をしていられるのにな」と思いながら登るうちに、後より、何やら黒い物がついてくるような気がする。まさに「山の神」である。虫の音と沢の水音が聞こえるだけ、やがて、夜も明けはじめ

岩盤が出はじめた頃、すぐ目の前に綿のような雲が一面に広がる。雲海である。雲の上に立つ谷川岳・茂倉岳・一の倉岳などの山なみが見える。その中の一の倉の岩盤は荒々しく、垂直に切り立ったむき出しの岩である。息をのみながら、しばらくたたずむ。

今までの、あの苦しみ、暗闇の登りも忘れるすばらしいながめである。また、ウグイス、ホトトギスのさわやかな鳴き声が、岩盤のくぼみの谷間から吹き上げる風にのって、私に「ようこそ」と呼びかけてくれる。

朝日岳の近くで一女性に会う。いつもの山の挨拶、そして「どちらまで」と問うと、「湯檜曽まで」と答えた。年頃21歳ぐらい、学生のようである。「気を付けて！」と声をかけて別れる。朝日岳の朝日が原で池塘を見る。高

山植物と湿原の魅力にとりつかれ、のんびりしたくなり、しばらく、高山植物の中に腰をおろし、思いをめぐらす。すばらしい雲海、山の美しい花、清淨な空気、まぶしい太陽の光と熱、水、草木、全てが私の生命に欠くべからざるものであることを改めて感じた。

今、こたつの中で、早春賦を口ずさみながら、春の小川のせせらぎに思いを馳せていました。

## 研修旅行に寄せて

郡司 誠子

山野草の会、最大のイベントである夏の研修旅行は、方面を決めるのが難しい。

いろいろな人のニーズに応えたい。多くの珍しい植物にめぐり会いたい。しかも、夏でなければできない事を含みたいなどなど……。どうしても欲ばつてしまふのだ。

それで、いろいろなガイドブックを調べ、アンケートをとり、きりん山に決定した。

今、ふり返ってみると、「思いがけない険しさを皆で助けあってのり越えた」という自信のようだが、今年の大好きな収穫といえるかもしれない。

しかし、万一件を考慮すると、そのかねあいがとても難しい。自然の厳しさを改めて考え、これらの活動計画を立てていきたい。

## 編集後記

### 山野に楽しく学ぶ

五十嵐 昭平

足の向くまま、気の向くままに人生を気ままに楽しくおくりたいと思う。



野に、そして山に、森林浴をしながら、春は山菜を、秋はキノコ狩りに。そして、人様の迷惑にならないように、ハンドルをしっかりと握り、東に西に、山野草をたずね、そして学びたいと思う。

今秋の10月18日のキノコ狩りは、お天気に恵まれて、スギヒラタケ、その他のコケもたくさん取れ、味も上々、秋の味覚をいっぱいに、本当に楽しかった。

（小日向・郡司・池田）

「かしのみ」第二号を発行できるかなと心配していましたが、今年も、内容豊かな記事で発行することができました。皆様の御協力に心から感謝申し上げます。